北村透谷夫人を訪ふ

須川末子

「いろ〳〵と新聞の種にされることですね」

と脇を向いて、丁度手の届くところにあつた花瓶の夏菊の枯葉を摘まゝれる。歩いて來たので暑くもあり極りが惡るくもあり、ちら〳〵使ふ扇の間にそつとあたりを見廻すと、玄關ともつかず居間ともつかぬ、下駄を拔いて直ぐに座つた三疊の隅に、オルガンが一臺据ゑられてある。

廊下を背にして座られた夫人は、輕るさうなモスリンの細かい白絣に黑のおみ帶して、白い襟の覗いて居る胸元もあつさりとして居られる。

「なか〳〵こんなことをしてる隙はないんですけどもね、今日は折よくまア一寸手が空いて居るんですよ。眞實に珍らしいんですよ今日のやうな日は」

と疊の塵をつまんで膝の上に運んで度々かう仰言られるのも御道理、日々會話のお稽古に通つて來られるお孃樣方をすましてから、ちよいと茲をと頼まれた飜譯ものなども爲さらなければなるまいし、夜は夜と夜學の生徒さん達が諦めるとのこと。その上一週に三度は府下の某師範學校の教壇に立たれるのだもの、ふいと飛び込んだ私ははこの上もない果報者と、貴重な時間を裂かれたのを感謝しなければならぬ。

そこで猶豫なくずん〳〵と話を積んで行けばいゝのだけれど、生憎この節方々の女學雜誌で流行の、私が何々した時の實驗だとかと何とかいふやうな、そんな問題を持つて居ない私は、夫人に對し時間に對し、甚だお氣の毒なわけだと氣が揉めて來た。たゞ未亡人が近況を見聞きすれば、それで私の使命は終るのだが、座談が下手なので思ふやうにお話を捕へることが出來ない。

「貴女達のお商賣はなか〳〵忙しいでせう、お暑いのに大變ですわね」

などゝ却て勞はれて恐れ入るばかり。

「お孃樣はどうなすつてらつしやいます、もうよほどおみ大きくおなりでございませう」

位なことをぽつり〳〵伺つて見る。

「えゝ今一緒に居りますよ、さうですね造作のないものですね子供の大きくなるのなんては」

透谷先生がお亡くなりになつた時、お孃樣のお年はお幾つだつたかと伺ふと、廿五年に生れたのだから數へて見たらわかるでせうと言はれて、自分の生れた年に四つ加へて、その四つを自分の今の數へ年から減いて見ると、胸算用には十九と出た、おみ大きくおなりでございませうなどゝ言つたのが極り惡るくなつた。

「藤村さんの「春」でございますね、あれをお讀みになつた時にどんな感じがなさいました？」

「別段どうつてこともありませんねえ。あの人達は材料として、御自分達の作の材料通してお使ひなさるんでせうから仕方がないでせうよ、それに私は自分のことを書かれてもさう讀んで居りませんから……今度會つたらもう昔のことなんか書かないでくれつて言はうと思つてますが其後少しも會はないから」と聲低く稍々獨り言じみ、「訪問してみよう

と思つても此通りの忙しい體ですから……エゝまア事實は殆ど事實でせうね、今更透谷の日記を繰り返したりして……でも彼の時代のことを書いたら勢ひ書かれなけりやならないのでせうよ」と直ぐにまた言ひ足された。

所謂ふうちやんと仰言るお嬢樣であらう、派手な浴衣の方が庭下駄を履いて降りられると、疊に手をついて體を捻ぢむけて、

「そら此方の方のをよく取らなくちや不可いよ、そこのが一番害をするんだから」

と聲をかけられる、メレンスの帶が後向きになつて跼んで居る上に、やう〳〵木らしくなつた桃の枝がさし翳して、家と家の間に狹く取つた庭の青葉の中に、二つばかり咲いたダリアの鉢が置かれてある。青い蕾の筒を頂きにつけて、鐵砲百合の背の高いのが稍々傾いて居る。

思ひもかけず未亡人と殘されて、それから間もなく九年といふ長い間米國で暮すに至つた其當時のお覺悟のことなぞ一寸伺つて見る。

「なアに別段大した覺悟つてこともありませんでしたねえ、一週間ばかりの間に一寸決つてしまつて、行つて見てはどうかつていふんで、その連れがよかつたものですから……もとより子供は一緒に居ませんでしたからね、別々になつて居て」

早くからお祖母さんの許に引き取られて、女の子のない家内の寵兒となつて居たのださうだ。

「情に負けるといふことはあまり好いことでもありませんけれど、また其處に眞の親の愛情といふものが含まれて居るのかも知れませんね、私にしたところで、まだ若いのに何處かへなんて言はれもしましたけれど子供が親といふ蔽ふものもなくて育つのは、其子の爲め第一の不幸だと思つたり、子供の前途を見届けてやらなければ親の義務がすまないやうな氣がしたり、それやこれやまたどうせ何かして生きて行かなくちやならないのならいつそ生き甲斐のあることをして見たいと思ひましてね」

「どうかまあ一人でも二人でも、社會に立つて折角稽古したことを役立つてくれるやうにと願つてますが、私の骨折りがそこまで行きますかどうか、なんだかちつとも譯が解らない」

横を向かれるとまた暫く話が切れる。私はふと先達て或る人から、貴女はよく目をパスするが態と冷やかな態度を裝ふやうで厭な氣がする、と言はれたことをどういふ譯か此時思ひ出した。

「兎に角日本にはさう遣つてる人はないのだから、講壇に立つたらどうだと言はれますけれど、そんなことはあまり望んでも居ませんから……それよりもどうかして……」

私は以前、もう餘程昔のことではあるが、ある雜誌で新歸朝者の透谷夫人が、女史の教育に就ての抱負を語つて居られたのを覺えて居たので

「何か學校でも……」と早速口を入れた。

「エゝまあ何とかして實用の方面のそんなものを遣りたいと思つてますが……なんですかさつぱり」

「でも計畫は出來(でき)つて居るのでございませう」

「エゝ……まあなんですかちつとも進みやしません」

後はそれに就ては話の網を手繰るよすがもない。暫くして、

「私はなんですね、今の教育に伴ふ弊害といふものを恐れますね、どうかして、そんな弊害を伴はないやうな方面を開拓して行きたいと思つてますがね、なんですよ世間の人は私をかう、或る意味でいふやうなハイカラな考へを抱いて居るものと思つてるか知れませんが、私はさうでもないんですよ、それは洋服も着ますし、英語もシャベリはしますけれどもね」

確か夫人は其雜誌の記者の説くに、日本婦人の美點と亞米利加婦人の長所を※き交ぜたところに理想を置かれたやうに覺えて居る。

門の戸がチリン〳〵鳴つたと思ふうちに、敷石に靴の音がして、

「御免下さい」

と人が來た。ちらと後を振り向いて見ると、ステツキを持つた背廣の人が立つて居る。私の脇の部屋の隙戸を開けて應對に出た人が、

「あゝ」

と聲を發したので知り合ひの方だといふことがわかる。背廣の人は、私が夫人との間に置かれた座蒲團の上に目を落して居るうちに、導かれて廊下に添つて曲つた座敷の中にはいつて行つた。そこは教室のやうな具合にでもなつて居るのらしい。

たま〳〵話は文士の上にうつつて、

「文人の妻になんてなる人は可愛いさうですね、覺悟をして嫁けばそれはいゝやうなものゝ見じめですからね、それでも今は大分進んで來ましたから透谷の時代のやうに苦しくはないでせうけれど、あの頃なんてんで雇つてくれ手がありませんでしたよ。今の方達は片つ方で職業を持つてやつて居られるからいゝですけれども……透谷の友達で今文壇に殘つて居るのは秋骨さんに藤村さんでせうね、あゝさうですか何かに書いてましたか、藤村さんもあゝいふ詩人の方ですから時々は思ひ出して下さるんpでせうよ、平田さんさう〳〵禿木さんですね、それでもあの方は時々生徒などを紹介してよこしてくれますよ」

今のお客さんもさぞ待つて居られるだらうと思つたら、もう落ち着いて居るのが勿體なくなつて、お話の切れ目を一にぢり後に退さつて、

「どうもお忙しいところを……」

とぴたりお辭儀をした。

「いえどうしまして、さつぱり要領を得ませんでした」

なんの〳〵、たゞ夫人にお目にかゝり得さへすれば、それで私の目的は達して居るといふもの、またお高説を叩く折もあらうと、長居の詫びを心でして表へ出た。

改めて門を仰いで見ると、瀬戸の表札は美しくMina Kitamuraと書かれて、上の方には實用英語會話教授の字を讀むことが出來る。

此邊は牛込の下宮比町と聞いた。心持ちのいゝ路が稍々後にかへつて來ると、飯田橋の通りの廣い路に出て、それを横切つて小路にはいると、今度は神樂坂の中程に出る。

【入力者注】

読み取れない漢字は※に置き換えました。

底本：文章世界　明治四十三(1910)年七月号
入力：小林　徹
公開：令和三年十二月十二日

水野仙子「作品年譜」に戻る